

ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

・折原注釈・補足九鬼

(1) ルターの宗教改革の意義。

「在俗平信徒」と「修道士」との宗教的二重構造を壊す役割を果たしたのではないか。ルターの「軌道転轍」以後、活発な宗教人は世俗内にとどまるようになる？

→世俗内的禁欲。

引用

こうして、人々の日常的な倫理的実践から無計画性と無組織性がとりのぞかれ、生活態度の全体にわたって、一貫した方法が形づくられることになった。

「聖徒」たちの生活はひたすら救いの至福という超越的な目標に向けられた。が、また、まさしくそのために現世の生活は、地上で神の栄光を増し加えるという観点によってもっぱら支配され、徹底的に合理化されることになった。

解説

そのためには**合理的な禁欲**が必要であり、合理的な禁欲のためには生活態度を合理的に秩序づける必要がある。彼らの禁欲は、まったく世俗的なものだった。かくして信徒たちは職業生活のうちで禁欲的な生活を営む必要に迫られた。そうした態度の規範は聖書、とくに旧約聖書の律法に求められた。彼らの合理的な性格はそこに由来している。こうしたカルヴィニズムの生活態度は、後期ピューリタンでは「現世生活全体のキリスト教化」にまで押し進められた。要約すると次のようになる。信徒たちは「自然のままの人間」がなしうる以上の行為によってしか救済は保証されないと考えた。このことが彼らに、自身の生活を禁欲的に統御するよう動機づけた。こうした世俗内での生活態度の合理化は、まさに天職の観念が作り出したのだ。

(2) 訳語としての Beruf の採用。

「労働／職務」の訳語として、聖句としては初めて、それまでにもっぱら「宗教的使命」、「聖職への招聘」に当てられていた語 **beruf** が適用され、「神与の使命」と「純世俗的職業」との両義を併せ持つ語 **Beruf** が創始された。

Weber の主張のポイント・・・折原は『ベン・シラの知恵』*を重視・羽入は『コリント I』を重視。Beruf か Ruf かのちがひ。

*ヴェーバーからすれば、全体の論旨から逸れて、むしろ非合理的伝統主義の要素が強いこの箇所を例示したのは、特殊ルター的な伝統主義を示唆するため。

(3) ルターには欠けていた「合理的禁欲」への宗教的動機をつけ加えた「禁欲的プロテスタンティズム」→カルヴィニズムの「二重予定説」*。

*予定説という表現で、救われる人間を神が予め定めていて、善行や人間の努力では変えられないということです。二重予定説は「救われる人間と救われない人間」を神が予め定めているということで、「救われない人間」＝「滅び」を意識したものです。ただし、カルヴァン本人は、ことさら滅びを強調したわけではないとされています。

誰が救われ、誰が滅ぶかは人間には分からないということです。つまり、救いは神の専権事項であ

って、一方的な恵み（恩寵）であるということです。そういう意味ではルターの信仰義認（聖書のみ、信仰のみ、神の恵み＝恩寵のみ）とほとんど一緒とも考えられますが、ルターの場合、善行という行い（行為義認）とは無関係に、悔い改めて、ただ神にすべてを委ねる信仰を通して、神の恵み（恩寵）によって人間が救いに導かれるとした点が異なります。信仰があれば誰でも救われる余地があるということになります。もちろん、信仰自体は人間が自ら持つことができるものではなく、神から与えられるものです。

- (4) 世俗内的軌道のうえで、禁欲的・合理的な「職業」労働による収益の増大、資本家機能への転身／転職、および絶えざる反伝統的革新による資本蓄積。
- (5) 「合理的禁欲」における宗教色の後退。
- (6) 「合理的ライフ・スタイル」の構造的再生産。
- (7) (6)への過度期にあつて「功利主義」への「転移」傾向をとめないながら、「禁欲のプロテスタンティズム」と「資本主義の精神」が併存。
- (8) 十八世紀人ベンジャミン・フランクリンの例示。

「功利主義」からみれば「非合理的」な禁欲的契機が、「貨幣増殖—信用獲得—そのための諸徳目」系列へと組み入れられたこと。

ヴェーバー自身の議論は、こうした契機を「功利的な傾向」とすると同時に「反功利的な傾向」として捉える難点を抱え込んでいると言う橋本が、代替案とするのは、次の三つの功利主義の区別である。すなわち(1)善悪の行為の外観を重視して、有用性や快樂のために役立つ限りで道徳的に振舞う功利主義。(2)善悪の実践を規範的に内面化した功利主義。(3)幸福主義や快樂主義の観点をまったく持たない功利主義。

橋本努は「有用性や快樂のために役立つ限りで道徳的に振舞う功利主義」(1)を「規範的に内面化していない功利主義」と呼んでいる。ヴェーバーはそうした「正直」、「時間の正確、勤勉、質素等」の善徳を「功利的な傾向」に数え（GAzRS,S.34/梶山・大塚訳(上)46頁）、それらの善徳を実践するように「改心」（Bekehrung,GAzRS,S.34/梶山・大塚訳(上)46頁）した物語を特徴付けているが、ここで功利性が価値合理的に把握されていることを、橋本は明確にしていない。

注：フランクリンから遡って、カルヴィニズムには行き着くものの、ルターにはたどりつけない。

- (9) 活発な平信徒宗教人の経済的活動を高めた、という因果連関の確定。

注：折原の説明はヴェーバーの因果理論に適合しているか？例えば、訳語の選定が、資本主義の精神を促したと論じることは、それほど自明か？